「アダムとキリスト」（ローマ五・一二～二一）

1　旧約とキリスト信仰

「ローマの信徒への手紙」の学び、今日は第五章の後半です。少し長めです。しかしまとまりのあるところです。

ここまでローマ書を学んできて、皆さんそれとなく感じておられるように、キリスト信仰を説くのにパウロは、しばしば、というより、ほとんどいつも、旧約聖書を引き合いに出しています。そこまでさかのぼって、キリストを信じることの意味を明らかにしています。

ある意味、パウロは、旧約の専門家です。専門家というより、だれよりも深くそこに生きていた人でした。私どもからすれば分かりにくいこともないわけではありませんが、パウロからすれば、旧約とキリスト信仰の関係は、まさに彼の書いている通りなのです。私どもとしては、それをできるかぎり正しく受けとって、自分のものとしていく以外にありません。

前の章、四章でパウロはアブラハムを取り上げました。イスラエルの父祖、ユダヤ人が誇りとしてやまないアブラハムです。私どもも二回にわたってこれを読んだところです。私ども学んだように、アブラハムは、信仰によって義とされた最初の人として、模範として取り上げられたのです。アブラハムはまさにユダヤ人にとっても異邦人にとっても信仰の父です（四・一六）。

さて今日の箇所でも、パウロは旧約の人物を取り上げています。ここで取り上げられるのは、驚くことに、あの人類の始祖アダムです。神によって造られた最初の人間アダムです。

アダムのことが出てくるのは、創世記第二章、そして第三章です。まず第二章に神に創造された最初の人間として出てきます。このアダムが妻のエバとともに蛇の誘惑に負けて、最初にエバ、次いでアダムが、取ってはならないと命じられていた、園の中央の「善悪の知識の木」から、その果実を取って食べてしまったというのが第三章にあります。こうして神に背き、罪を犯したアダム。ですから私ども、キリストのことを知るためにアダムが引き合いに出されていることに、驚かないわけにはいかないのです。アダムとキリストの間に何か関係があるというのでしょうか。共通点があるというのでしょうか。あるようには見えません。正反対にすら見えます。アダムは罪深い人類の父祖ではないのでしょうか。そのようなアダムと、キリストとの間に、どんな関係があるのでしょうか。無関係という関係、それ以上の関係は何もないように思われます。

2　キリストを指し示すアダム

関係がないかに見えるアダムとキリスト、この両者の比較からキリスト信仰を説くのに、パウロは、アダムをどう理解するかから始めています。アダムとはどういう存在かということです。

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです（一二節）。

「一人の人」とは、アダムのことです。アダムによって罪が人類に入り込んだ。それだけでなく、罪が入り込んだことによって死が人類に入り込んだと、パウロはここで語っています。

〈アダム〉というのは〈土（アダマ）〉という言葉に由来する〈人（アダム）〉という意味です（創世記二・七）。人は、土の塵（ちり）から造られ、神の命を吹き入れられ生きる者となった。聖書は、アダムを、いわば人間の代表、祖型（そけい）と考えています。人類の始祖アダムが罪を犯した、それゆえ私ども人間も罪深い、それはある意味私どもにも分からないではありません。

しかしもう一つのこと、アダムの罪と共に、死もまた人類に入ってきた、とパウロが言っているのは、どういうことでしょうか。その事情は、神がアダムをエデンの園に移し置いて言われた時の言葉から明らかです。創世記第二章です。

主なる神は人〔アダム〕に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創世記二・一六～一七）。

聖書で〈死〉という言葉が出る、ここが最初です。この「食べると必ず死ぬ」ですけれど、毒にあたって死ぬということではありません。神の命令、掟を破ったから死ぬということです。神の裁きです。それが人の死なのです。ですから「罪によって死が入り込んだ」というのは、すべての人が、アダムの性質を引き継いで罪を犯したがゆえに、神の裁きとしての死を、だれも免れないという意味です。

しかし逆に言えば、罪が人類に入ってくることがなかったとしたら死もなかったということでしょう。エデンの園で、最初の人間アダムと、妻エバとのはじめの生活がずっと続いていたら、死はなかった。神との交わりの中でその命は永遠に続いていたはずなのです。

しかしそれは、俗に言う〈たら、れば〉の話です。アダムは現実に罪を犯したのです。エデンの園は永遠に失われた。私どもは罪深い存在です。死を免れない。私どもこの世に、言い換えれば、楽園を失った中に生きています。私どもの生物としての自然の死も、いつも何かしら、神の裁きの様相を呈するのはそのせいなのです。その死がすべての人に及んでいます。

こうして、私ども、人間の在り方は、アダムにおいて決定されたのです。その決定の外にだれも立つことはできません。アダム的人間、それは、例外なく、私どものことです。アダムと、その末裔（まつえい）たる私どもアダム的人間のことを念頭において、改めて一七～一九節を読んで見ましょう。

一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです（一七～一九節）。

どうでしょうか。これら数節を読んで、パウロが、人類の代表アダムを引き合いに出して、イエス・キリストのことを語ろうとした意味が、少しお分かりになるのではないでしょうか。

〈アダムとキリスト〉、本来類似点はありません。片や神の被造物、片や神の子です。その性質も互いに違っています。とはいえしかし、まさにその役割において似ていることは明らかです。

〈アダム一人と他のすべての人間〉、〈キリストおひとりと他の多くの人間〉、すなわち、〈一と多〉、この形において両者は同じです。結果的に同じというのではありません。アダムは、はじめから、今日の箇所の言葉を用いれば「来るべき方〔キリスト〕を前もって表す者だった」（一四節）というのです。「前もって表す者」はほかの訳では「来るべき方のひな形（タイプ）です」（協会共同訳）とか、あるいは「きたるべき者の型である」（口語訳）とか訳されています。アダムは、キリストの「ひな型」、キリストを指し示す者であったのです。

アダムというこの一人の人において、すべての人が罪と死とに支配されるようになったとすれば、キリストという一人の人において、すべての人は、恵みと命の支配下に置かれたのです。アダムという一人の人によって、すべての人が罪人とされたのであれば、それが本当であるかぎり、キリストという一人の人において、すべての人は義とされ、正しいとされるのです。

3　恵みの支配

ここで言っていることを、どのように説明するのがよいのか、分かりませんが、敢えて言えば、こうでしょうか。

器にもられた水、バケツの水でもいいでしょう。そこに一滴の墨をたらせば、たちまち全部が黒くなってしまいます。黒くなった水に何をたらせはよいでしょうか。別

の一滴によって、一度汚れた水が、全部一瞬にしてまたきれいになる、元どおりになるのです。

いや元どおりになるだけでない。前とは比べものにならないほどの、まったく次元の違う輝きを放つようになるというのです。それゆえ「恵みの賜物は罪とは比較にならない」（一五節）のです。

そのことを今日の箇所は、アダムの「支配」から、キリストの「支配」へと移し置かれることと言っています。

こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです（二一節）。

この〈支配〉という言葉は、使い方によっては、ひじょうに権力的、権威的にひびきます。アダムの支配はそうかも知れません。人間は罪に隷属し、その下から脱することはできません。しかしキリストの支配は違います。隷属ではない。それは人間を自由にする支配です。

アダムの支配を、いま読んだ二一節で、罪が死によって支配することだとパウロは言っています。罪は、死を道具のように用い、人間に、神の裁きとしての死の恐れを与えて、人を萎縮（いしゅく）させます。これに対してキリストの支配を、恵みが義によって支配することだとパウロは説明しています。人は義とされ、罪の赦しの下で自由にされます。

この神の支配は、しかしまだ完全な形では行われていません。私ども自身がこの世にあって、なおもアダム的なものにとらわれ、とらえられていることを認めざるをえません。とはいえしかし、そうしたアダムの支配は、キリストの十字架を仰ぐときすでに打ち破られていることは明らかです。私どもはこれを信じ、告白し、宣べ伝えるのです。この世を支配しているのはアダムの力ではありません。世はキリストの支配の下にあります。すでに夜は明けています。

その意味で、すでに私どもはキリストの所有（もの）、キリストに属します。私どもの内側も外側も、信仰も生活も、この〈わたし〉においてキリストの恵みの支配が現実であることを証しするのです。

イエス・キリストがその十字架で罪をあがない、撃ち破ったがゆえに、罪の力、死の力は、もはや私どもを脅かすことができません。罪の罰としての死はキリストが受けてくださったのです。だれにも終わりがあります。私ども皆死を迎えます。しかしその死は罪に対する裁きとしての死ではない。死はキリストにおいてすでに克服されて命がもたらされたのですから。

アダムとキリスト、私ども、すでに打ち破られたアダムに付くことは、もはや許されません。今日洗礼をお受けになる三人は、イエス・キリストに従おうとしています。キリストを主として受け入れ、従い行く志を表しておられます。主の平安を祈り願ってやみません。

（二〇二三・三・一二）